

『源氏物語』桐壺卷における李夫人説話

田中 洋子

『源氏物語』桐壺卷には、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の故事を主題とした白居易「長恨歌」の影響が強いことは、注釈家の注をまですとも本文中に「長恨歌」の詩句及び「長恨歌」そのものの言及が多いことから周知の事実である。

現在、身近にある諸家の校註、評釈（注1）にも必ず「長恨歌」への言及はみられるし、『源氏物語』という「長恨歌」というように中国文学模倣のよいモデルとしても取り上げられる。「桐壺」巻のみを見ても、特に前半の桐壺帝と更衣の悲恋を描く箇所には「長恨歌」の引用が多い。また「長恨歌」の影響についても諸家の研究が多いが（注2）ここにもう一人の唐土の女性の面影が指摘されている。（注3）藤井貞和氏のひく李夫人説話との関係である。

李夫人の話に及ぶ前に「長恨歌」そのものが仮託の文学世界であることに留意する必要がある。李夫人説話との関係について詳細な分析をなさった新聞「美氏によると

「漢皇」は漢の最も華やかな時代を形造った武帝を指すといわれ、玄宗は武帝に喩えられているのである。『傾国』の語は、音曲をもって武帝に仕えた李延年が武享の前で歌った歌——略——による。（注4）

武帝の時代に仮託されているのは確かだ。いわば「長恨歌」そのものが李夫人説話の外衣をまとった楊貴妃の物語で

あるといつてもよい。「長恨歌」を引く時、そこには李夫人が陰画のように二重写しにされている。

さて、その李夫人である。漢の中興の英主といわれた武帝は中国歴代の皇帝の中でも最も派手好きな皇帝といつてもよく、張敖らの西域経営、衛青、霍去病らの対匈奴戦など、中国の領土拡大に成功したが、女性関係も非常に派手だった。最初の皇后、陳阿嬌については「金屋藏嬌」のエピソードがあるが、この驕慢な美少女は後に巫蠱の罪で廃位され、長門宮に追われる。司馬相如に賦を書いてもらって帝寵の帰らんことをはかったのは、この人である。

二度目の皇后が踊り子あがりの衛子夫で、所生の皇子は皇太子となり、兄弟の衛青、甥の霍去病は武帝の信頼厚い將軍となった。が、晩年は悲劇的で、謀反の心ありと誣告され追いつめられた太子は挙兵したが、たちどころに帝の軍に敗られ、衛皇后と太子は郊外の廢屋で自害して果てた。後に無実だったと知った武帝は、太子に戻（れい）太子と諡（おくりな）し、思子宮という様を建てて子を偲んだという。

衛皇后が冊立される前に武帝の寵愛を受けたのが李夫人である。が、彼女は佳人薄命というとおり若くして病死する。兄の李延年在彼女を武帝に推荐する時に歌った

北方有佳人

絶世而独立

一顧傾人城

再顧傾人国

寧不知傾城与傾国

佳人難再得

△漢書・外戚伝▽

の詩句が「長恨歌」に響いているということは前述した。李夫人は、むしろその死によって有名であり、李夫人説話もそこにスポットが当てられる。

白居易は「長恨歌」とともに李夫人も詩にしている。その詩「李夫人」の冒頭に

漢武帝 初喪李夫人

夫人病時不肯別

とあるのは、そのまま桐葉帝と更衣の別れの場面に置き換えられるというのは新聞氏の説のとおりだ。（注5）

『漢書』には武帝が李夫人の病床を見舞った時のことが詳述される。

初　李夫人病篤^{キト}　上自臨候^メ之^ニ　（注6）

「上（帝）自ら臨候す」とわざわざ書くことが、この事態の異常さをあらわす。日本の帝が瀕死の更衣の退出を許さず自ら見舞うことも異常だが、この事態のモデルとして武帝の「臨候」があったことも充分に考えられよう。が、ここからが違ふ。別れ難さを口にする帝と更衣の場面と異なり、李夫人は最初から「夫人蒙^{リテ}被^{リテ}謝^{シテ}曰^ク」、つまり、李夫人は掛け物を頭から引きかぶつて武帝に顔を見せようとしなない。

妾久^シ寢^メ病^ニ　形貌毀壞^シ　不可^ク見^レ帝^ニ　願^{ハクハ}王及兄弟^ヲ為^レ託^{サント}

病やつれしている顔を見せられない、ただ王（子供）と兄弟をよろしく頼む、というのである。武帝がどんなに言葉を尽くして頼んでも、夫人は頑として顔を見せようとはしなかった。いささか機嫌を損じて武帝がその場を去った後、責める姉妹に夫人は言った。

所以^ハ不^レ欲^セ見^レ帝^ニ者　乃^チ欲^{スル}以^テ深^シ託^セ兄弟^ニ也　我^ガ以^テ容貌^ノ之^ノ好^ム

得^{リテ}從^リ微賤^ニ愛^シ幸^ヲ於^{ケル}上^ノ　夫^レ以^テ色^ヲ事^{フル}人^ニ者　色衰^{ニテ}而愛弛^ミ　愛弛^{マバ}則^チ恩絶^ニ

今見^バ我^ガ毀壞^ラ　顔色非^ズ故^ニ　必^ズ畏^レ惡^ミ吐棄^{セン}我^ヲ　意^ニ尚^ホ肯^{ケン}復^ス追思^{スル}　閱^ミ錄^セ其^ノ兄弟^ヲ哉

非常に政治的な発言である。「色を以て事え」ていた李夫人は、やつれた姿を武帝に見せ寵が衰えることを畏れた。遺児や兄弟に帝寵を得させ続けるために、顔を見せなかったというのである。したたかな政治性をもった美姫だったと

言っている。王と兄弟のための帝寵——それは単なる愛顧といったものではありえない。現に兄の李弘利は武師將軍となり、対匈奴作戰に参加し、海西侯に封じられたし、いまひとりの兄李延年も協律都尉に任じられている。(注7) 帝寵とは官位、地位、現世的富貴、栄達に直結していたし、そうなるように、というのが夫人の最後の意志だったのである。

(李夫人没後、武帝が方士の術で香煙の中、夫人のまぼろしを見た、という李夫人説話後段のくだりも、「桐壺」巻との関係が指摘されているが、今はしばらく捨く。)(注8)

ひるがえって、桐壺帝と更衣の別れの場面である。ここには姉妹の者はあらわれない。濃密な二人(側には女房もいただろうが、全く無視されている)の別れが綿々とかわされる。更衣の危篤の様子も、李夫人と比較され得る。武帝が李夫人を悼んで詠った賦との対照が新聞論文に鮮やかに述べられている。(注9) あるかなきかにはかなく、更衣は帝にまみえ、苦しい息の下から

かぎりとして 別るる道の かなしきに いかまほしきは 命なりけり
えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば・・・
いとかく思う給へましかば、と思も絶

と最後の言葉を言った。「いとかく思う給へましかば」には、古来註釈がかまびすしい(注10)が、ここはとにかく「ほんとうにこのように思っておりましたら」ととつておいてよからう。

問題は「聞えまほしげなる事はありげなれど」である。更衣がこの期に及んで申し上げたいこと(実際には発語されなかったにせよ)とは何だったのか。諸註あるが、大体「残していく幼子をよろしく頼む」ということ、と解している。それは誤りではない。死に行く更衣が夫君に頼む第一は、子への愛顧であるにちがいないからだ。が、ここに李夫人を投影させてみると、この言葉に陰影がついてくる。更衣の遺言の場面が李夫人の影響の下に書かれたのは確かだと思いが、ここまで李夫人の段を換骨奪胎し得た作者が、李夫人の意志を読み誤ることはしなかったろう。李夫人の非常に現世的、政治的意志を汲み取らなかったはずはない。その時、この更衣の「聞えまほしげなること」は、ある現実的な重さをもつてきこえてくる。更衣は、我が子を皇位に、という意志を帝に伝えたかったのではあるまいか。微賤の出の李

夫人と違い、更衣は大納言の娘であるから帝龍のみを寄つて立つ基盤とする李氏一族のように、一族の存立を帝に頼む必要はなかった。とすれば、残る一事——我が子の政治的成功とは、帝位しかないだろう。更衣は故大納言の野望を体現する形で入内した。あまつさえ、帝龍を専らにし、「玉の男御子」を生(な)したのである。更衣が我が子の即位を望むのは、全くの夢物語だったろうか。

いや、何よりもそれが実現可能の事態だった事を知っていたのは弘徽殿女御である。「坊にも、ようせずは、この皇子の居給ふべきなめり」と、世論もその可能性を証している。

だが、弘徽殿女御腹の一の皇子の立太子が行われた以上、それは無理だというのはどうだろうか。前述したように武帝は一度の廃后、一度の廃太子を実行している。武帝のみならず中国の王朝史の中で廃太子は珍しいことではない。それも日本の廃太子のように政治的にのびきならない状態での廃位だけではなく、単に帝龍がその生母から別の女に移っただけで、廃后、廃太子は実行された。「長恨歌」のモデル、唐の玄宗も自分の最初の皇后(武氏)を廃しているし、即位前には先帝(中宗)の皇后、韋氏と娘の安樂公主を宮廷クーデターで殺害し、その首を市にさらし、位を剝奪、庶人に貶している。玄宗も武宗も、妻や子の廃位を何回も経験しているのだ。そうした中国王朝の諸事件は当時の貴族階級にとって、就中、作中の桐壺朝の人々にとって周知の事実だったに違いない。廃太子の脅威は弘徽殿女御にとって切実なものだったし、だからこそ桐壺更衣とその所生の皇子に執拗な攻撃をしかけたのだろう。実に陰湿な、いかにも後宮政治闘争にふさわしい攻撃を。

そして、桐壺更衣自身は、政治的野望もなく死の間際に帝に言いおく言葉として「子どもをよろしく」とだけ言うような、甘い女性だったのだろうか。「聞えまほしげなること」の含意は誰よりも帝には痛いほど分かっただろう。二人の拠つて立つ虚構世界の、その又モデルである世界がそういう理解を促す。

典拠の本説の何を取り入れモデルとしたかも大切だが、典拠の何を書かなかったか、表面的には切り捨てた本説が果たして全く関係ないものなのか、そこに作者の含意を読みとることもできるのではないだろうか。こう読んでいくことによって、はかない哀れな母、愛に殉じた女性としての桐壺更衣の造型が、したたかな強さ野望を秘めながらも、だからこそ仕絶な後宮の政治的闘争に敗れ、疲弊し尽くして無念な死をとげる、複雑で現実的な女性像に深められるとはいえないか。

漢文学との比較を、単なる字句の比較にとどめず、内容を比較精読してゆくと、新しい『源氏物語』の地平が開かれてゆく。やがて、この「聞えまほしげなこと」が桐壺帝と光源氏、そして弘徽殿女御に力を及ぼしていく。それについては別稿にゆずることしたい。

注1

岩波古典文学大系、小学館古典文学大系、新潮日本古典集成などの古典叢書、玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）、新しくは至文堂『源氏物語』桐壺巻なども含む（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』）

2

『源氏物語と漢文学』（和漢比較文学叢書12）汲古書院
桐壺巻と「長恨歌」 藤井貞和（『源氏物語の世界』一所収）

3

藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」（『文学』昭47・1）
新聞一美「李夫人と桐壺巻」（論集日本文学・日本語2中古）阪倉篤義監修 昭52・11）
以下、新聞論文はこの論の引用である。

4

ibid. P240

5

ibid. P242～243

6

『漢書』（中華書局刊）外戚伝第六十七上（P3951）訓点は私に付す

7

ibid. P3952

8 新聞前掲論文 P241~242

9 i b i d . P 2 4 5

10 古註の中では『花鳥余情』のみ、諸註とは違つ註を付すが、ここでは略す。古註（『細流抄』『花鳥余情』『岷江入楚』など）は『源氏物語古註集成』（桜楓社）による。